

北日本病虫研報 31: 87—88 (1980)

Ann. Rept. Plant Prot. North Japan

秋田県下に発生したブドウ褐色葉枯病

高橋 俊作・丹波 仁*

Occurrence of Grape *Cristulariella* Leaf Spot (*Cristulariella pyramidalis* WATERMAN and MARSHALL) in Akita Prefecture

Syunsaku TAKAHASHI and Jin TANBA*

1979年8月、ブドウの病害としてはこれまで観察されたことのない大型不定形、褐色病斑で、落葉を伴う病害が発生した。検討の結果、*Cristulariella* 属菌による病害で、*Cristulariella pyramidalis* WATERMAN and MARSHALL と同定した。発生は 秋田県県南地方の2市、2郡下に限定されており、発生園率52%、発生園面積率57%で、約100haに及んでいた。発生品種は観察の範囲ではキャンベル・アーリーとナイヤガラであった。発生園では時期の経過につれて落葉し、園によっては果実の着色遅延枝の登熟不良を示し、枯死枝をみた園もみられた。

ブドウの葉に病斑を生ずる病害としては黒とう病、輪紋病、べと病、灰色かび病、さび病などが主要なものであるが、1979年8月に秋田県県南地方のキャンベル・アーリー、ナイヤガラにこれら病害とは病徴を異にし、早期落葉を生ずる病害の発生が認められた。検討の結果、*Cristulariella* 属菌による病害であることが確認されたので、発生状況などについて報告する。

なお、本病の名称については横山 (1974) は環紋葉枯病を提唱しているが、畑本・藤井 (1974) が提唱しているブドウ褐色葉枯病 (*Cristulariella* leaf spot) をあてたい。

発生状況

1979年8月上旬に、秋田県平鹿郡十文字町のキャンベル・アーリーとナイヤガラ園で葉に褐色～灰褐色円形輪紋状の病斑で、病斑中央部に白色輪紋状の菌そうを生ずる特異な病徴を示し、既に落葉さえもみられる病害が発生していた。その後、各地から同様な症状の病害の報告、被害物の持ち込みがあり、かなり広範囲な発生であることが予想された。1979年10月に発生状況を調査した結果第1表に示したように、県下全域の発生ではなく、平鹿郡、雄勝郡下の市町村で発生しており、県中央部、県北部では発生がみられなかった。県南2郡下の発生は、発生園率52%、発生園面積率57%であったので県南地方ブドウ園の約1/2に相当する約100haに及ぶ発生と推定された。

発生品種は、調査した範囲ではキャンベル・アーリーとナイヤガラに限定され、ポートランド、巨峰、レッドポート、ネオマスカットでは発生していなかったが現場の報告ではポートランドでの発生もあったとされているので、キャンベル・アーリーやナイヤガラ以

外の発生も推定される。

10月の調査であったので、発生園での発生程度は著しく、大部分の園では落葉し、園によっては果実の着色遅延による未収穫、枝の登熟不良を示していた。大方の園は県防除基準に準じた防除か、あるいはそれ以上の防除を実施していたが、本県では晩腐病防除を主体としているので、本病に対する防除が適当であったか否かは不明である。

第1表 ブドウ褐色葉枯病の発生状況 (1979年10月)

発生確認場所	県南地方での発生状況	品種と発生程度
平鹿郡十文字町	調査園数 60園	キャンベル 卅
〃 平鹿町	発病園率 52%	ナイヤガラ 卅
〃 増田町	調査園面積8.4ha	ポートランド ー
湯沢市	発病面積率57%	巨 峰 ー
横手市		レッドポート ー
		ネオマスカット ー

病原菌

本菌の分生子柄 (Sporophores ; conidiophores と conidia とは区別がはっきりしないので、両者をまとめて呼んでいる) は全体として細長く、ピラミット形または紡錘形を呈し、中心軸の長さは0.5~1.0mm位で、肉眼でも確認できる大きさである。これが本病鑑定の決め手となる標兆とされている。分生子柄の長さは80~190 μm 、巾は12~18 μm 、ピラミッド部の長さは250~500 μm 、最大巾80~190 μm 位で、畑本、藤井 (1974)、周藤 (1976) の報告と一致した。分生子柄は軸と尖塔状の頭部とからなって、分生子梗が2~3に分岐し、その先端に2~4 μm の球形の分生胞子

(phialoconidia) を形成した。培養基上の諸性質についての詳細な観察はないが、自然病斑上に形成された分生胞子による接種試験で病原性が認められた。

以上の結果、本病は畑本・藤井 (1973, 1974) らの結果と同一と考えられるので、*Cristulariella pyramidalis* WATERMAN and MARSHALL と同定した。



写真1 ブドウ病斑上の sporophore

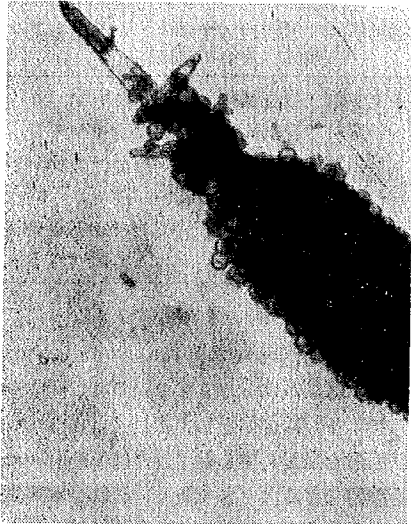


写真2 sporophore頭部

病 徴

本病は葉のみに発生する。初め1～2mm程度の褐～灰褐色円形の斑点として生じ、やや水浸状で急速に拡大する。病斑が多数発生した場合は融合して大型病斑となる。病斑の拡大につれて同心円状の輪紋を生ずる。病斑の裏面は淡褐色で、葉表病斑のように明瞭ではない。病斑が古くなると、病斑内に灰白～灰褐色の分生子柄を無数に形成し、小昆虫の脱皮殻の付着を思わせる。8月上旬には既に落葉を生じはじめ、落葉期まで増加した。



写真3 ブドウ褐色葉枯病の後期病斑

本病は寄生範囲が広く、多犯性菌類といわれ、横山 (1974)、周藤 (1976) 畑本・藤井 (1974)、によって明らかにされているとおり、12科13属、13種に及んでいる。本県ではブドウで確認されたのみであるが、当然ながら他の果樹、樹木などでの発生も予想される。今後発生生態、防除上の知見が必要と考えられるので、さらに検討していきたい。

引 用 文 献

- 畑本求・藤井新太郎 (1973) 日植病報(講要) 33 : 189.
 畑本求・藤井新太郎 (1974) 植物防疫 28 : 349—350.
 横山竜夫 (1974) 植物防疫 28 : 346—348.
 周藤靖雄 (1976) 植物防疫 30 : 497—500.